

一九七六年第二次カラコルム遠征隊

〜シエルピ・カンリ初登頂

Sherpi Kangri 7380m

井上達男

はじめに

山岳部創設百周年記念誌にシエルピ・カンリ初登頂の記事を寄稿するにあたり、三十九年前の記録を久しぶりに開封してみた。報告書や日記、通信記録、アルバム、そして当時の研究資料などを見直してみるとすっかり忘れ去っていたことが昨日の出来事のように鮮明に蘇ってくる。改めてこの遠征の意義を考え直してみる良い機会となった。

報告書「コンダスの女王シエルピ・カンリ」平井一正編神戸新聞出版センターは主筆平井隊長の生き生きとした文章が臨場感にあふれ当時の出来事が次々に脳裏に浮かんでくる。この山を神戸大学が初めてのヒマラヤ遠征の対象として選んだことについて隊長は『……エベレストをみてもわかるように、処女峰の登頂は先人の努力の積み重ね負うところが大きい。しかし、できれば全くの処女峰であってほしい、というのが偽らぬ気持ちである。日本人が初めて登ったマナスル(8125m)は、戦後



コンダスの女王シエルピ・カンリ 7380m コルコンダスの村から

間もない昭和二十六年ごろ今西錦司が「記録なし、故にこの山」という決断で決定した山である。……』と例を挙げて、戦後三十年もたつて残っていたそのような山、シエルピ・カンリを選んだ幸運を述べている。神戸大学の過去の遠征を顧みても「未知

への探求と「挑戦」が伝統として脈々と続いており、シエルピ・カンリ以降にクララ・カンリ(7554m)初登頂、チェルー山(6168m)初登頂、そして2009年、山脈全体の6000m峰が全て未踏であった崗日嘎布山群のロプチン峰(6805m)の初登頂に至っている。山の発見から登路の偵察、そして初登頂へと苦労は並大抵ではないが成功の喜びの大きい未踏峰登山は既知の山でのバリエーションルート挑戦とは一線を画したものである。ヒマラヤの未踏峰はもう数少ないと言われて久しいが、東チベットには未だその姿さえ未知で未踏の6000m峰が数多く残されている。「未知への挑戦」がまだまだ実践できる。シエルピ・カンリ遠征は、パタゴニア探検以来積みあげてきた神戸大学の未踏峰登山のスタイルを揺るぎなきものにした。

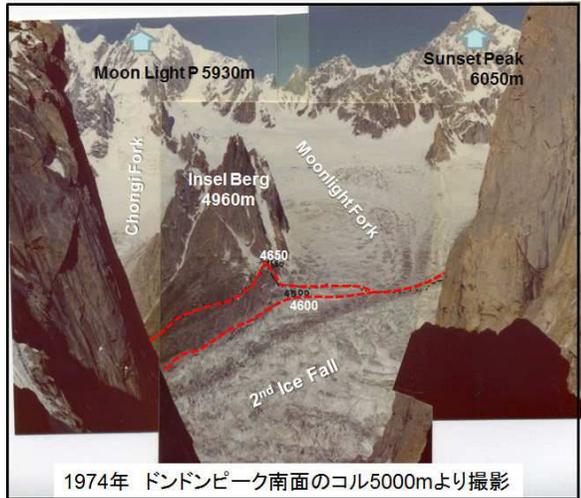


図-1 シエルピガン氷河西稜線

山は計画時点、山行中、下山後の記録整理と三度楽しめるといわれているが、四十年近く経つと多くのことが忘れられ、改めて新鮮な気持ちで見つめ直すことと新発見もある。本稿執筆で四度目の楽しみをさせてもらっている。第二次隊のシエルピ・カンリ初登頂のエピソードに触れる前に最近手に入れた情報からシエルピ・カンリの登山史と、最新の衛星データ(Google Earth など)から得られた地図情報について述べたい。

◇シエルピ・カンリの登山史、

シエルピガン氷河に最初に足跡を残したのは誰か

シエルピガン氷河に史上初めて足跡を残したのは1911年、ワークマン(Workman)夫妻の探検隊であると考えていた。ドイツ人の登山家で平井一正名誉会員とも親交のあるハイヒェル氏(Mr. Wolfgang Heichel)の研究[注記-1]によるとアドルフ・シュラーギントワイト(Adolf Schlagintweit)が1856年にシエルピガン氷河に入ってスケッチを残していることが判明した。ハイヒェル氏から筆者にスケッチの場所を同定するよう依頼があった。その位置は1976年のTBCとBCの間、シエルピガン氷河の西からの支流(Gendarme West Fork および Moonlight Fork)が合流するあたりと推定した。また、アドルフは「独立峰の雪で覆われた斜面の5950mに到達した」と記述しているが、この高度は我々の第一キャンプや第四アイス

フオールを越えたシェルピ・ラの標高に近いので当時の装備ではたして到達できたかどうか疑問が残る。あるいは氷河の後退が進んでいない約六十年前の入山であり氷河の状態が極めて良好であったのだろうか。当時、高度の測定は水の沸騰点温度から推定したと思われるのでその精度は信頼性に乏しい。

注記1:「アドルフ・シュラーギントワイトの一八五六年のカラコルム及びナンガ・パルバット行に対する新たな知見」ウオルフガング・ハイヒェル :山岳 vol.104 2009年, P-A39-A102

また、ワークマンがどこまで足を踏み入れたかもハイヒェル氏の調査項目であり、こちらも筆者に同定依頼があった。筆者は1974年ドンドン氷河に足を踏み入れてドンドンピークの南面を標高約5000m、シェルピガン氷河本流側のキレットまで登り、西方、インゼル・ピークや西氷河を偵察した。

そこから撮影した写真(図1)と似たパノラマ写真(図2)がワークマンの報告書にあり、山岳二〇〇九年のページA57にハイヒェル氏が引用している。写真のキャプションに「1911年のワークマンのパノラマ: チョルコンダ・シェルピガン氷河とシェルピカンリ(左)」と翻訳が書かれている。原文も読んだが翻訳の間違ひではないのであるが、写真のピークはシェルピ・カンリではない。それは仮称ムーンライト・ピーク(Moonlight Peak)である。また、ワークマンの撮影位置は筆者が登った岩場ルンゼのキレットから標高で約50m強下方、シ

エルピガン氷河第一アイスフオールとドンドン氷河を分かつ丘の上であると同定した。ワークマンがチョンギを越えてシェルピガン氷河の奥に入った形跡はない。

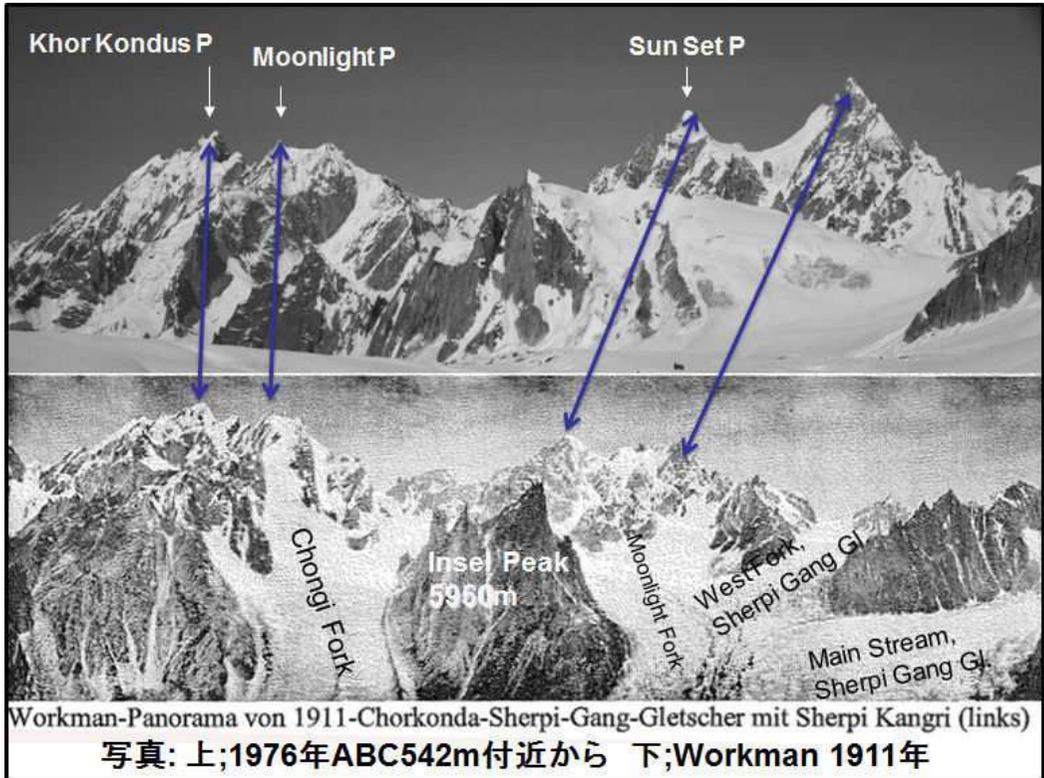


図-2 ワークマンはコルコンダスピークをシェルピ・カンリと誤認

パキスタン観光省の話では1975年にイギリス隊が神戸大学第一隊の報告を参考にシェルピ・ラに到達し、スノードーム(6420m)に登った模様だが、報告書は得ていない。2001年にはケニス・ヒューイット(Kenneth Hewitt:カナダの水河学者)がシェルピガン氷河に入り、1976年の神戸大学TBCBC間の氷河上から撮影したシェルピ・カンリの写真を残している。筆者の知る限りの情報は以上でその後は情報を得ていない。

◇各キャンプ標高の再考

昨今の衛星観測技術である Google Earth や ASTER の

NO	地点	1976年報告書	Google Earth
1	チョンギ下	3700	3850
2	チョンギ(峠)	4500	4655
3	TBC	4300	4450
4	BC	4850	5050
5	ABC	5250	5420
6	C-1	5850	6050
7	シェルピ・ラ	5700	5950
8	C-2	6350	6500
9	P-9 (Eagle Head)	6550	6700
10	C-3	6800	6900

mの標高は変わらないが、その他のピークや氷河上の各キャンプの標高が第一次、第二次遠征当時にアネロイド式高度計で測

GDEM データから得られる情報を使って最新のスケッチ地図(図・3)を作成した。そこから標高について詳しくデータをみていくと、サルトロ・カンリ(7742m)とシェルピ・カンリ(7380

定した高度と大きく異なっている。表・1に主な地点の比較を示す。ベースキャンプの標高は4850mと考えていたが、どうやら5050mとするのが妥当なようである。

全般に150m~200mの差異があるが、考えられる原因は1976年当時高度計の起点合わせに問題があったかもしれない。カパルが唯一地図上で標高がはっきりしていた場所であり、そこで最初の調整をしている。また、コルコンダスで調整したが、その標高に誤認があったのではないだろうか。その後一切の調整をすることなくメータ表示を読み取っていた。頂上アタック時、7000mを指してからどんどん登っているのに全く標高が高くなかったので機器に問題もあつたようだ。

現在、GPSにより精度よく標高や位置が把握できるようになっているので未知の山中に入っても1976年当時とは比較にならないほど位置認識が容易になっている。2007年のロブチン峰偵察時に山田健達は悪天候で数日停滞後にホワイトアウトの中、クレバス地帯をGPSのトラックバック機能で無事にベースキャンプに帰着できている。

初めて到達する高度での行動は遅くなるので一度決めたキャンプが後に近すぎてもっと先に移動するといったことは時々発生するが、GPSを活用すると標高が精度よく把握できるのでキャンプの位置を決めるのにも確信が持てる。

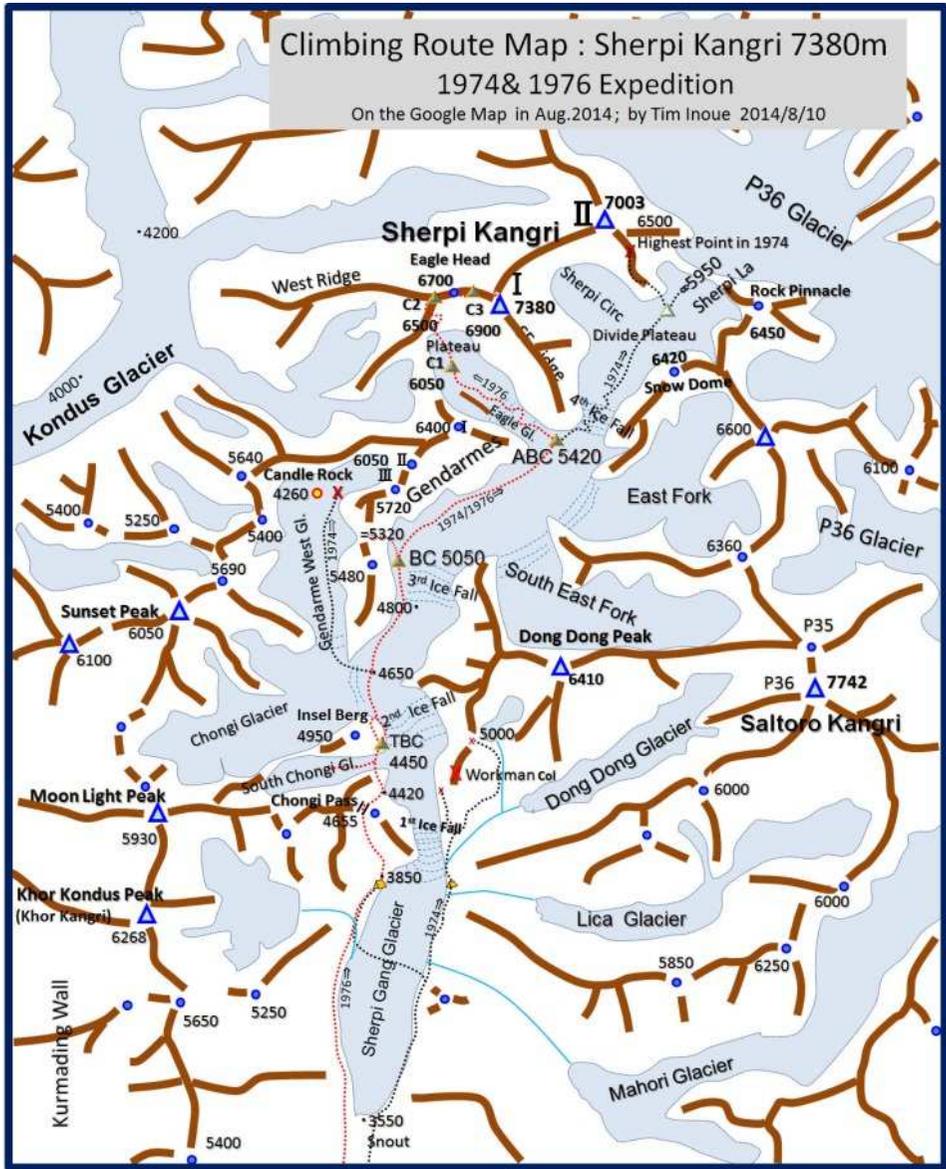


図-3 Google Earth、Google Map をベースに作図した地図 2014年

とにかく、四十年近く経った現在、キャンプの標高を修正する必要が出たことは驚きであるが、技術の進歩に負うところが大きい。

◇シエルピガン氷河の地図

1974年当時、国内で手に入れることのできる唯一の地図は1912年発行のFanny Bullock・Workman 地図(図-4)であった。一次隊がシエルピガン氷河に踏み入れる時、連絡将校が持参していた地図はパキスタン軍のもので、軍事機密として彼が厳重に保管していた。じっくり見せてもらったが、ワークマンの地図以上のものではなく、全く役に立たなかつ

た。

一次隊ではアリダートによる方位測定と肉眼観察、スケッチ、写真から地図を試作した。二次隊ではそれを下敷きに今度はトランシットでより正確に測量し、一次隊の地図を修正して地図

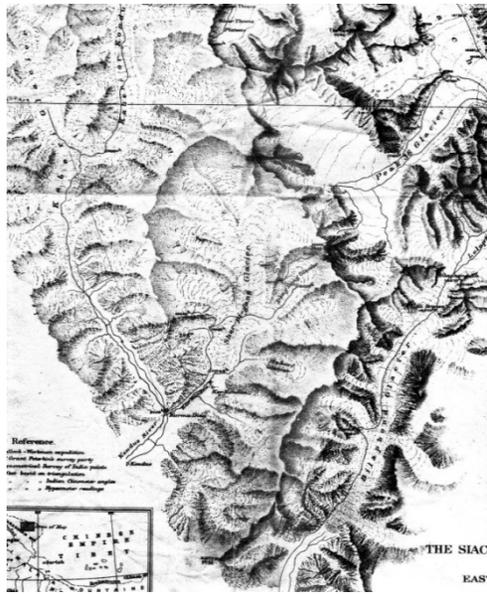


図 - 4 1912年発行の Fanny Bullock - Workman 地図

(図・5)を作成した。このたびこの原稿を書くために衛星データを活用してスケッチマップを作成した。1976年当時のスケッチマップと比較して精度が高まったと認められるが、1976年の地図もなかなか精度よくできている。当時の測量と地図作成の結果について検証試験を受けているような気分である

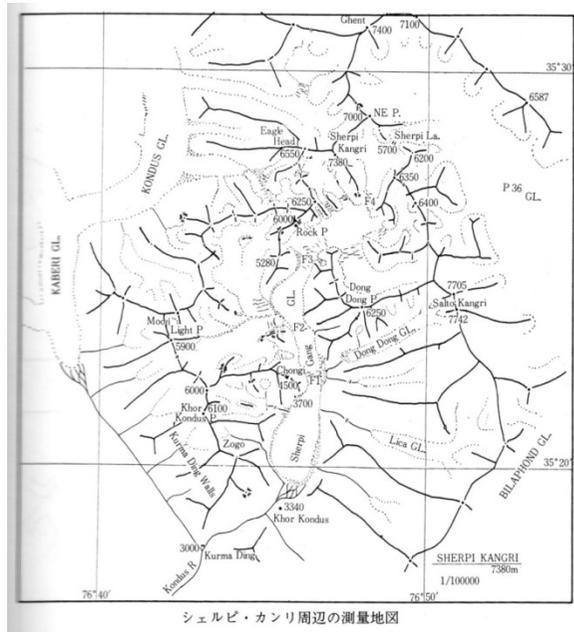


図 - 5 1976年、測量から得られた地図
(標高は高度計数値から推定)

が、結果として合格点をもらえたようでほっとしている。添付の三つの地図をジックリ見ていただければその違いが明確である。図・5ではリカ (Lica) 氷河の位置に誤りがある。リカ氷河はドンドン (Dong Dong) 氷河の一つ南の氷河で、リカ氷河と書かれている位置はマホーリー (Mahori) 氷河が正しい。登山に地図は不可欠であるが、人跡未踏の地に踏み入る未踏峰登山では正確な地形図を期待することはできない。中国の地形図は軍事機密から門外不出となっているが、参考までに閲覧させてもらおうと崗日嘎布山群のように未踏地域の山岳について

は精度が高いとは言いがたい。登山には衛星写真や衛星観測データの方が有効だと思う。今回のレビューで改めて地図は時代が進むとともに正確になっていくものだと感じた。またこれからの未踏峰登山のあり方にも一考が必要であろう。

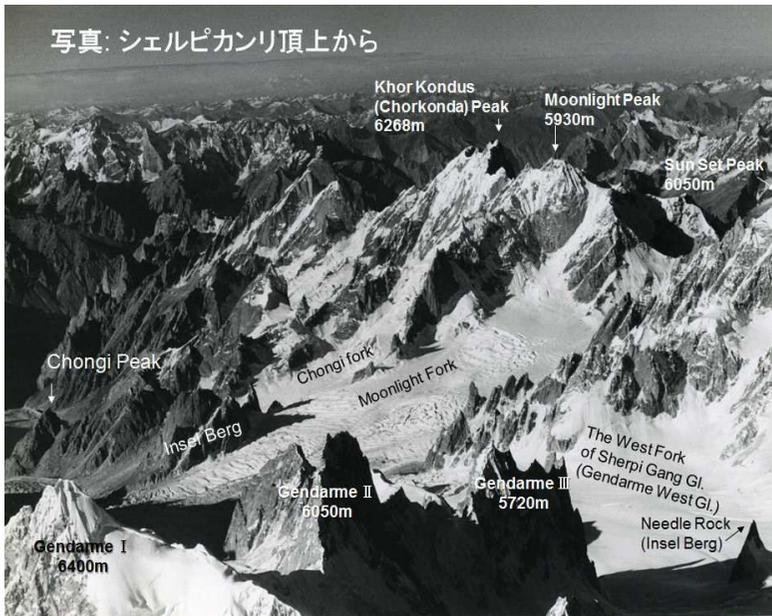


図-6 尖塔屹立するシェルピガン氷河西側の稜線

シェルピ・カンカリ初登頂

シェルピ・カンリは920万年前に隆起した比較的新しい花崗岩の山であるらしい。現在も隆起を続けているようなのでまだまだ高くなるのであろうか。花崗岩の山は無数の尖塔屹立といった様相で容易な登山ルートに恵まれない場合が多いが、この山も登路は厳しいものであった。四つのアイスフォールを越え、セラック崩壊雪崩のある危険な側壁から急峻な岩と氷の稜線を伝ってようやく頂上付近の冠に至る極めて困難な山であった。幸運にも登頂できたのは周到なる準備、隊員たちの高い技量と良きチームワークはもちろんのこと、予期せぬ出来事の起きた時の各自の対応力にみられる高度なパーティーシップ、それに隊長のリーダーシップが噛合い、最後に幸運の女神が味方してくれたお蔭であると思う。

それに至る道筋は容易ではなかったが、キャラバン初日に発生した渡渉時のポーター水難事件が隊に大きな警告を与えてくれた。隊員に自覚と意識改革を促し結果として素晴らしい遠征隊に変身させたと思えるのでそれをまず取り上げたい。

また、数多くのエピソードの中から登頂に至る最大の難関であった西稜登攀に焦点を当てて第二次遠征隊を振り返ってみよう。

◇渡渉事件

それは1976年6月16日夕刻に発生した。



図-7 渡渉事故発生場所

私の遠
征日記は
「197
6年5月
10日、二
年前の9
月、無念
の涙をこ
らえて帰
国の途に
ついてか
ら1年と
8ヶ月、
再びパキ
スタンに
やってき
た。」で始
まり、約
200ペ
ージ、克

明に行動を記録している。それによると、パキスタン入国から一ヶ月強経つてようやくキャラバンが発発したのだ。

カプル(Khaplu)から対岸のサリン(Saling)にザーク(羊の皮袋と柳の枝で組んだ筏)で荷物と人が渡る。荷物は前日に対岸に渡してハイポーター達が荷物番をしている。そこからキャラバンがスタートするが、ポーター138人、サーダー一人、ハイポーター6人、コックに助手、連絡将校アサット大尉と隊員10名、総勢158名が渡るのにまる半日が必要だった。広石一英と私はハイポーターのアサッドにコックのハッサンとともにサルトロ川をウルセー(Ghoorsay)に渡るルート、これはそこから峠を越えてタガス(Thagas)に至る最短ルートで1974年には水量が少なく渡ることができた、を偵察し、ダメなら上流のマチュル(Machlu)からハルディ(Haldi)にフーシエ(Hushay)谷を渡る渡渉地点を確保すべく本隊に先行して偵察に出発した。ウルセーへの渡渉はためしに入ってみると腰まで浸かり水流も強く危険で断念した。

十一時半には河岸段丘にあるマチュルの下、川辺にあるオンブーチョに着いていた。

そこで、広石とハッサンに荷物番をしてもらいアサッドと私に加えてタガスに帰るといふ男の三人でハルディに向かって渡渉を試みた。川幅は約400m、幾筋にも分かれて流れていた。水量は膝下まで特に危険を感じることもなく約二十分で対岸に渡ることができた。十二時半、元の地点に戻り本隊の到着を

待った。午後四時二十分、連絡将校アサッドと岡本信洋ドクターが先頭で到着した。

そこで早く到着したポーターの一部を先導して渡ってしまえば後は従うと判断し、連絡将校にその旨確認し、渡渉を開始した。渡り始めて少し水量が増加しているのを感じたが、夕刻でもありこれ以上は増水しないだろうと考え本日の野営予定地ハルデイへ急いだ。この後、六名のポーターが流された。

報告書に平井隊長が現場の様子を書き留めている。

『朝、まだあけやらぬうちからいかだ渡しは始まっているが、荷物が無いとは言え、一回に運べるポーターの人数はしれている。結局、最後の者が渡り終ったのは十二時をまわっていた。ポーターたちは着いた者から荷物を持ってサリンに先行し、サリンからいよいよ一団となって行進する。』

食糧、装備、医薬品、学術用品など、ひとり三〇kg近い荷物である。一列になって歩くポーターにまじって、隊員たちはそれぞれのペースでキャラバンをたのしんでいる。キャラバンの第一日というのは、ポーターも隊員もなんとなくぎこちないものだ。お互いに相手の様子をうかがっている。事件は、そういった硬さがとれないこの日の夕方に起こった。マチュルでフーシェ川を渡ると、対岸のハルデイまではカバルから一日行程だ。すでに先発隊はハルデイに先行し、キャンプの準備をすすめていた。一方、ポーターたちがマチュルについたのは夕方の五時に近かった。「きょうはここまで。」と居座る一部のポーター

ーをなだめすかして、ようやくポーターの一団が川を渡り始める。幅三十メートルほどで流れは早いが、せいぜい膝下ぐらいまでの水量である。先頭集団が渡り終わったころ後続集団から突然、ポーターのひとりが下流に流れていくのが目にうつった。とっさのことで、私は事の重大さを悟るのに少々ひまがかかった。荷物と一体となって黒い影が下流に走る。助けようとしたポーターがまた流される。ひとり、またひとり。二、三十回浮き沈みして、人も荷物も止まったものの三人とも人事不省。

何しろ水温はセ氏八、九度、気温十五度前後である。鼓動は微弱で、すでに虫の息であった。仲間が死んだとポーターは泣き叫ぶ。渡ることを納得していた者と、あくまで反対していた者が、事件を契機に河原のあちこちで取っ組み合いのケンカを始める。石がとびかい、収拾がつかない。

ドクターは川を渡り終わっていたが、ただちに引き返し、衣類をはぎとり、寝袋にくるみ、カンフル注射。惜しげもなくケロシンを注いで大きなたき火を作り、体をあたためてやる。その間にテントに收容し、やつと命をとりとめた。「心臓検査しないで採用していたら、死人が出たかも……」岡本ドクターは額の汗をぬぐいながらこう言った。

それにしてもきわどいところだった。もし死者がでていたら遠征は中断の事態になったかも知れない。「神はわれわれを救いたもうた。」敬虔なイスラム教徒であるアサッド大尉は何度もこうつぶやいた。そして「誰も悪くない。」としきりに私を慰め

てくれる。しかし、私は内心おだやかでなかった。

ハルデイまで突っ走ってしまった先発隊。後のことを考えないでそれを追ってしまってしまった一部の隊員。事件を処理したのはわずか五人であった。何故こういう失態が起こったのか。皆の心にゆるみがある。われわれは、トランシーバーで連絡し合い、失態の原因を反省した。雨もしとしととふり出して気分がよけいにめいる。夜も十時すぎになって、やっと夕食。わびしくも情ないキャラバンの第一夜だった。

ポーターの先頭集団が中州にのこしてきた荷物が気になって、私は、まんじりともせず夜をあかした。鶴谷、居谷、広石の三人は、流されたポーターに寝袋を貸したためによく寝られず、朝から寒そうにふるえている。

流されたポーターは三人だが、川の中でスリップして衣服をぬらした者まで便乗して、結局六人がテントで寝ていた。テントのまわりに嘔吐したあとがある。昨夜気つけ用にブランデーをのませたための二日酔いとわかり、ドクターが苦笑している。彼らにはもう全く心配はなかった。

夜あけをまって、昨日の先発、井上が連絡にやってくる。何でこんな所で流されたのか全くわからないとしきりに首をふっている。「ザイルをはって渡らせましょう。」彼はあくまでも強気だ。しかし、一たんおじけづいたポーターたちは断固渡渉を拒否し、橋のあるカーネ村(Bale Gond)を経由してハルデイに行くことを主張した。このコースは増水期にとるコースで、二日

余分にかかるが、いささかうしろめたい気持ちのわれわれとしては、彼らの主張をのまざるを得なかった。アサッド大尉もポーターを説得することは無理であると判断した。彼も昨日の指揮のまずさの責任の一端を感じているようであった。いい男だ。昨日のことを思い出すと、ともかくキャラバンを再び始めることができるだけでも幸運と思わざるを得ない。少々日程のびて費用がかかることなど、ささいなことだという気になる。

井上たちにはハルデイで待つようにといい、われわれはカーネをめざす。ハルデイについては二日後の六月十八日だった。出発地のカパルはまだ指呼の間にあり、なぜこんな所に三日もかかったか、いまいませがこみあげてくる。久しぶりに皆一緒に夕食をとる。ハッサンが腕をふるったニワトリの串焼きとチャパティだ。夕食のあと、今回の事件に関する反省会をひらいた。事件のあと二日たっており、冷静な判断ができるころだし、また皆の言いたいことをきかねばならない。

はじめは重かった口も、ぼつぼつとひらいていき、夜の十時すぎまで議論は続いた。ハルデイ泊りときめて先行してしまつたのは、一次隊の経験から、当然ポーターは来るものという先人感があったのではないか。そしてそれに皆ひっぱられ、マチユルで対策を打つのがおくれた。しかし、それは根本的な原因でない。失態の原因は結局誰かがやるだろう、という安易な気持が皆にあったことではないだろうか。隊全体の把握が十分でなかった私にも責任がある。事件が起こらなければわからな

ったいろいろな問題点が浮きぼりになり、大いに反省させられた。』

事件の夜シユラフもない田中俊甫副隊長、中村正男、木本義治高屋、緒方俊治と私のところに、交信で平井隊長の怖い声が届く。渡渉を甘く見ていた結果であるのと夕方五時過ぎの行動は登山の鉄則に反している。しかし、もっと大切なことは遠征隊が様々な予期せぬ障害や困難に遭遇したとき、決められた役割だけを真面目に実行しているだけでは足りないことに皆が気づいたことではなからうか。それぞれの役割にほころびが生じたときにそこをカバーすること、出た問題や課題に対して誰がその責任者として活動するかという課題オーナーシップの明確化、現場状況の隊長への報告や連絡と皆で情報を共有すること、など能動的で活力ある隊員たちの行動がチームワークを越える高度なパーテイシップの発揮となるということを思い知らされた。事件の発端を誘引したのは偵察の任にあった私の独断専行であったことは間違いないので大いに反省したのは言うまでもない。さらに突っ込んで、ポーターを単なる輸送の手段にすぎないと観るのではなく、彼らもプロジェクト推進の大切な要員であるし、同じ人間として国と文化を越えて交流する機会を与えられた大切な時を共有している、という認識の欠如があったのではないだろうか。

この事件から得られた教訓は私のその後の会社経営の大事な理念として生き続けた。異文化、異宗教を越えて親交を温める

ことが戦争を無くする大事なこともあると信じている。

◇西稜にルートを求めて

シエルピ・カンリの二次隊は8mmの固定ロープ3000mを使った。主として西稜の登攀に使用している。登攀の核心は西稜のルート開拓にあるのでそこに注目して記録を振り返ってみたい。各地点の標高は1976年当時に使っていたものを記載する。

七月五日 晴れ後快晴

今日は西稜を間近に見ようと田中、中村、井上の三人でABCを出発した。一次隊で船津登下クターと西内博が偵察したジヤンダルムの支氷河(Eagle Glacier)を快調なピッチで登ってゆく。雪が良く締まっっていてアイゼンが快適だ。それぞれアイスハンマー、ユマール、アイスバイル、スノーバー、固定ロープを持って、初の高度にしては元気に先に進む。何としても西稜取付きを見てこようと頑張ったが行けども行けども見えるのは同じ部分ばかりでとうとう高度計が5810mを指す所までやってきたが氷壁の取付きだけは全く見えず。しかし、西稜のほとんどが良く見え、なんとか頂上まで行けそうな気がしてくる。C1はカール状の所を登った氷河の上がよさそうである。出発前にどこまで登るか決めずに登ったが、正午の交信で「無理せずには帰ってこい」と隊長の指示もあり今日はここまで。

七月十日 小雪後曇

六時二十五分ABC出発。ザイルパーティ、鶴谷一居谷、緒方一井上

十二時十五分 C1予定地 (5910m)

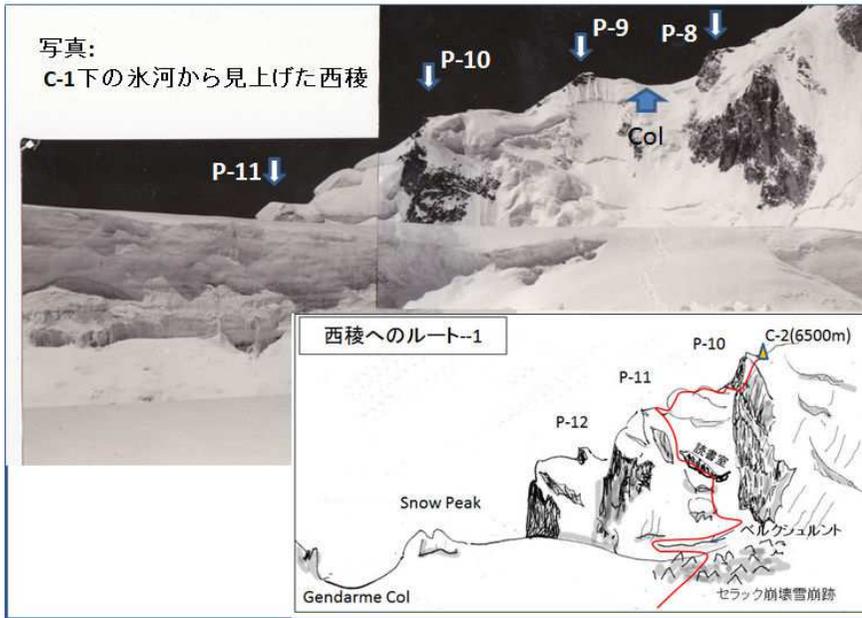


図-8 西稜登攀-1 西稜へのルート

十三時 緒方と二人で西稜のコル到達。セラック崩壊雪崩の痕跡生々しい

十四時 C1帰着 鶴谷一居谷パーティと合流し、ABCへ下山開始

鶴谷・居谷パーティに先行し、C1予定地に器材をデポして緒方と二人で先日見えなかった西稜側壁の偵察に氷河をコルまで登った。ガスが巻きだしたが氷河の奥ノ院に歩を進める。ここは鍋の蓋のようなどでシエルピ・カンリの西稜と東南稜の大きな壁が作り出した懐のカーブで小さなアイス・フィールドとなっている。西稜のP・11からジャンダルムI峰に至る稜線は中間に小さなスノーピークのあるこのアイス・フィールドで分断され、奥の院の氷はシエルピガン氷河とコンダス氷河に分かれて流下する。コンダス氷河側は標高差2000mの絶壁と懸垂氷河になっている。P・9、イーグルヘッド(Eagle Head)とP・10の間に氷壁があり、セラックが大きく斜面に張り出している。コルにはそこから発生した大きなセラック崩壊雪崩のデブリが生々しく西稜へのアプローチを拒絶するように横たわっていた。背丈にも達するような氷のブロックが無数に散乱している。つい先ほど起きたのではと思わせるほど生々しい。背筋がぞつとするような恐怖感に襲われる。西稜へはP・11右側の氷壁を登るか、P・11の下をトラバースしてP・12に出るのだが、今日は圧倒されただけで冷静にルートを観察するに至らなかった。西稜をルートに選んだことが間違いでなかったかと、

心が萎えてしまった。しかし、一次隊の経験から他に選択肢はないことがはっきりしている。もう一度じっくり観察することにして今日の偵察を終えた。

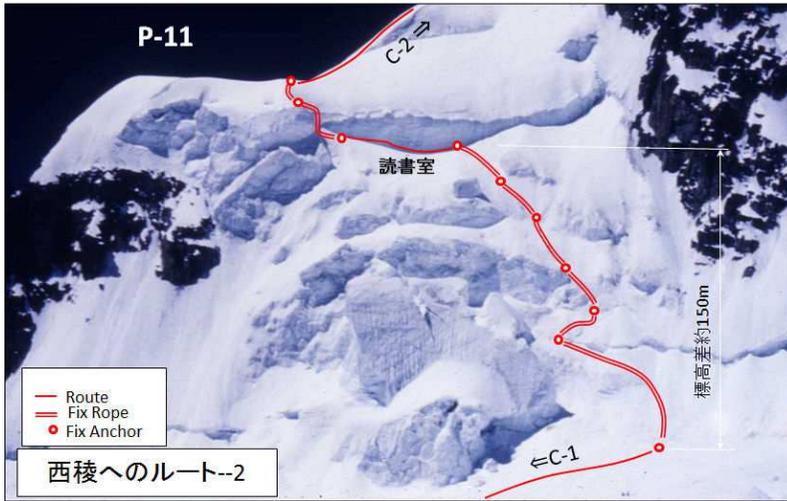


図 - 9 西稜登攀-2 氷壁突破

七月十三日
快晴
七時 緒方一
井上パーティ
で〇〇出發
八時 西稜取
付
十三時二十分
庇の下(読書
室)到着
十四時半 C
一帰着
いよいよ西
稜に取りつく
ことになった
が、まずはル
ートを決めな
ければならな

い。雪崩のデブリを越えながら西稜に迫っていくとまずはP・12へのルートは絶望的と分かった。P・10の右手の氷壁も雪崩が怖い。結局はP・10とP・11の間の氷壁しかないことが解った。良く観察すると巨大な氷の庇が幅広く氷壁に覆いかぶさっている。その下にクレバスがあるがそこは安全地帯のようである。庇の上で発生した雪崩は庇を飛び越してクレバスには降りかからないようだ。その下にはセラックがいくつか発達中であるが崩壊はなさそうである。庇の下に直登するルートを拓けば短時間に突破でき、雪崩の危険に曝される時間を極力短くできそうだ。庇から上は左端の垂壁に繩梯子をセットすれば荷上げもできるだろう。樂觀的

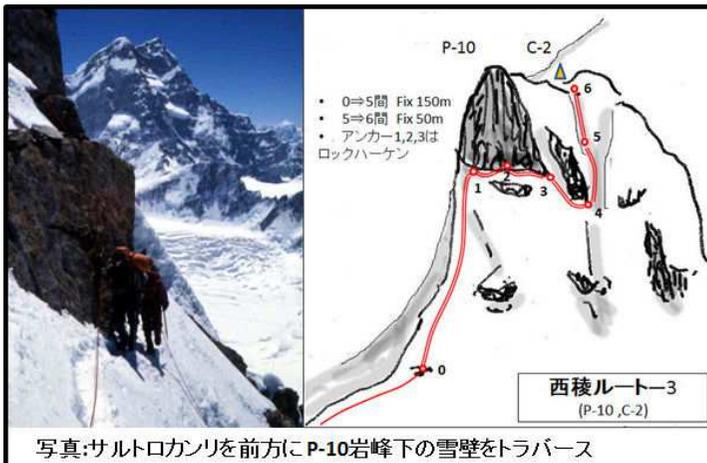


図 - 10 西稜登攀-3

な見通しを自分に言い聞かせながら「緒方、やるか」と問いかける。彼は「それしかないですね」とすまし顔で答えたが私から顔をそむけていた。彼も躊躇しているのだ。

今日は平井隊長がルートを見に登ってくる。それまでに庇に到達していなければきっとこのルートに反対するだろう。カールで平井隊長と広石が見守る中、8mm固定ロープ220m、スノーバー八本を使用して庇の下に入った。

C・1に帰って平井隊長と意見交換する。隊長はかなり弱気だ。今日拓いたルートは庇の上にラビーネットク(雪崩の道)のような筋がテラテラと光っている。発生したら大変だと、P・10寄りの岩交じりの氷壁にルートを付け替えるように隊長から指示が出た。庇からP・10寄りにトラバースして下降しながらフィックス工作すれば多少雪崩から安全なルートになるかも知れない。(ルート変更は様子見となった。その後幸いにも庇の上からはスノーシャワー程度しか雪崩は発生せず、ルートは変更されなかった。)

何はともあれ今日は6000mラインを突破できた。緒方と二人、今日はC・1泊まりである。みかんの缶詰で祝う。庇の下は後ほど居谷が休憩中にその安全性と快適性から読書室と名付け、厳しい登攀の緊張が続く西稜でほっと一息つくオアシスとして活躍した。

七月十四日 快晴

六時 緒方・井上 C・1出発

八時 読書室

十一時 P・

11 稜線

昨日に続いてルート工作。雪の堅い朝のうちにできるだけ稼

ぎたい。日が当たると雪が腐り

ルートは延びないし暑くてたま

らない。今日の成果は読書室の庇の下から抜け出し、垂直の氷壁に5mのワイ

ヤー梯子をセット、さらに150m、8mmロー

プを固定してP・11に到達した。

西稜に出ると

K・6、リンク

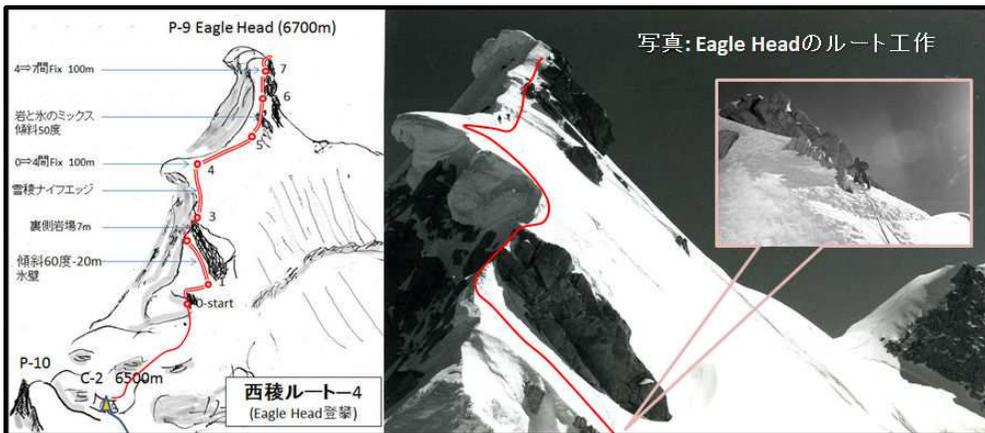


図 - 11 西稜登攀-4

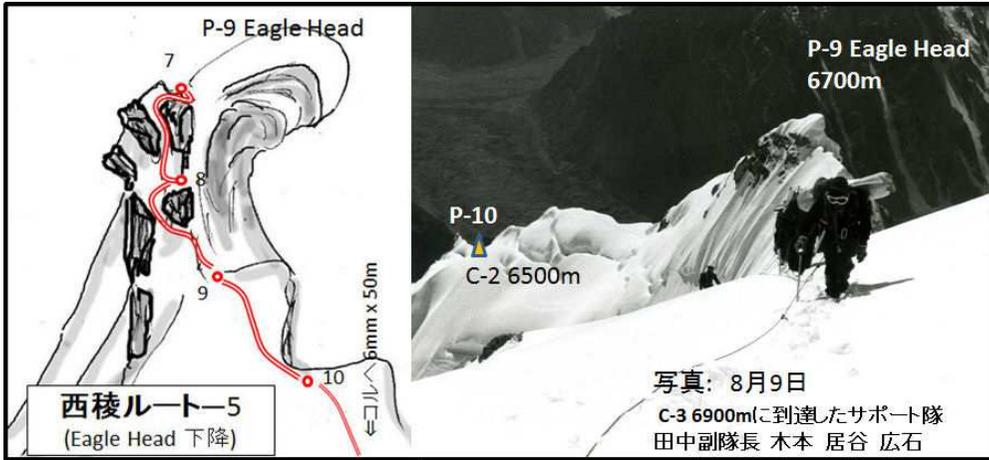


図 - 12 西稜登攀-5

サール、K・7、などに加えてマッシュヤールムの素晴らしいロックタワーも見える。フィックス・ロープ150mを使い切った所で引き返す。これから先は次のパーティにルート開拓を託して緒方井上はABCまで休養に下山する。

七月十五日 快晴

六時十分 田中、木本・パーティはC・1から西稜のルート工作に出発。二人梯子の部分に9mmの登攀用ザイル40mを固定し、さらに8mm固

定ロープ100m、スノーバー4本、アイスハーケン3本を消費してP・10の岩壁に迫った。田中副隊長が途中で体調不良となり、ルート開拓を中断してC・1に引き返した。

七月十八日 晴れ後曇り

そろそろ天気も下り坂だ。C・1から出発した中村・緒方と居谷・広石の2パーティは順調にルートを延ばした。午後四時まで頑張つて、8mm固定ロープ300m、スノーバー3本、ロックハーケン6本を消費してP・10の岩壁基部に到達した。

七月十九日 快晴後晴れ

六時 井上・広石 工作隊出発
七時二十五分 緒方・居谷 荷上隊出発
十時 P・10 岩壁基部にてルート開拓開始
13時 P・10 C・2予定地到達。

P・10の岩場は基部の雪壁を右手にトラバースし、回り込んだところの雪のクローワールを40m登ればピークに達する。トラバースはグラニュー糖状態の雪に急傾斜の岩が隠されていて一歩踏み出すと雪が剥がれ、アイゼンが岩肌をこすってスタンスが崩れる。何度も雪を固めてステップを作りつつ右手に15m程進むと雪壁に出た。途中にロックハーケン3本、スクリュー1本、アイスハーケン1本を叩き込んだ。東に双頭の巨大な岩峰、サルトロカシリが立ちはだかっている。クローワールはスノーバー2本を打ち込みP・10に到達した。

そこは雪田でパンケーキ状のコブが二つ並んでいて間が丁度

良いテントサイトになっていた。K・2、ガシャールブム、チョ
 ゴリザなど、カラコルムの峰々が天空に屹立したすばらしい眺
 望が我々を待っていた。C・1からC・2まで固定ロープ920
 mを消費した。

P・10からシェルピ・カンリりの西稜はP・6(Eagle Head)のシ
 ヤープなピークの後方に広い雪稜が肩へと続いている。

七月二十四日 晴れ、時々霧

七月二十日に田中、中村がC・1からC・2に荷上して、C・2
 入りの準備を始めたが悪天が前進を阻んだ。二十三日、田中、
 中村、木本、広石にサポートされて、居谷、緒方、井上がC・
 2に入った。

七時 居谷・緒方・井上パーティC・2からP・9のルート工
 作に出發。そして今日、P・9は驚頭のニツクネームにふさわし
 く、南米の白き鋭鋒ネバド・・をイメージするような迫力で
 頭上にそそり立っている。闘志が湧いてくる。

八時、アンカーのスノーバーを雪に深く埋設しルート工作開
 始だ。いきなり岩稜がリッジから右下に露出した傾斜のある氷
 壁に出くわした。ダブルアックスで硬い氷にツアツケを蹴りこ
 み、腰の滑車に固定ロープを吊り下げじわじわと高度を稼ぐ。
 リッジに到達すると反対側は大岩壁でコンダス氷河まで切れ落
 ちてものすごい高度感を感じる。強い風が吹き上げて顔面を叩
 く。なんとかリスを見つけてロックハーケンを打ち込みカラビ
 ナにザイルを通すと一呼吸だ。リッジの背面の岩場を数メートル

登って再び稜線の
 南面に戻った。8mm
 のロープを引き上げ
 てアンカーに固定し、
 後続の登るのを待っ
 た。そこからトップ
 を交代しながら順調
 に雪稜を辿ってフィ
 ックス・ロープを延
 ばし、岩と雪のミッ
 クスした傾斜のきつ
 い頂冠部を見上げた。
 P・9の頂は大きな
 雪庇が今にも崩れそ
 うにコンダス氷河側
 に張り出している。
 南側には岩稜が何本
 か重なるように頂冠
 を支えている。

午後二時、200
 mの固定ロープを張
 り終えるともう少し
 でP・9の頂という

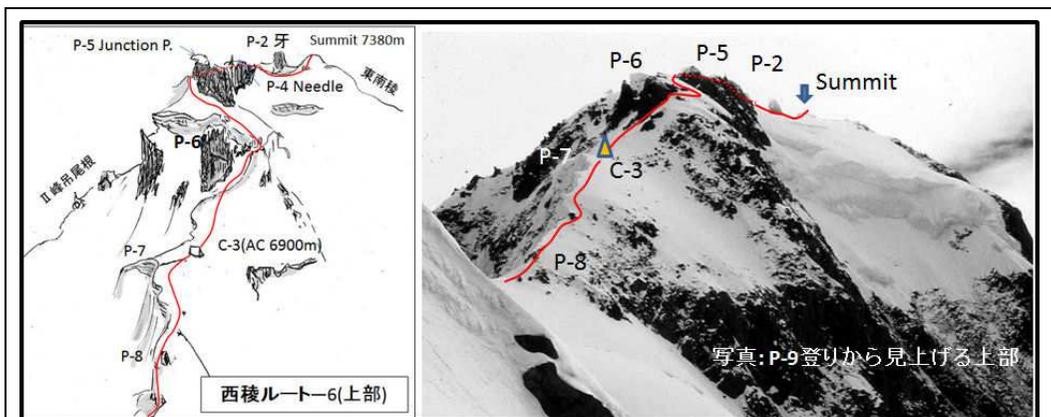


図 - 13 西稜登攀-6

ところに到達した。P・9の反対側、西稜のコル(ナマズの口と名付けた稜線上にクレバスのあるところ)への下りが心配で早く見たいのだが、無理は禁物、明日に残してC・2に引き上げた。西稜の難関は取付きの氷壁、つづいてP・10の岩場、そしてP・9さらに肩の下P・6の菱形岩壁が二つ並んでいるところ、最後に頂冠部分の岩場と見ていた。

7月二十五日 晴れ、時々曇り

今日は居谷にトップでルート工作してもらおう。P・9の頂冠部分は右手に岩、左手に雪庇で、境目を慎重に進んだら右手の岩と雪のミックス部分からナマズの口に続く稜線に下るルートがあった。

雪稜に降り立って振り返り見ると雪庇の張り出しに驚愕、いつ落下しても不思議でないまでに発達していた。ラッキーである。P・9を越してしまうと肩の岩壁下、雪の台地まで岩交じりの稜線を辿ることになるが、P・9と比較して傾斜も緩く、アタックキャンプ建設時にルート工作しながら登ればよいと判断した。

P・9のルート工作でC・3(アタックキャンプ)建設のめどが立ち、C・2組は翌日一旦C・1に下った。折から天気が下り坂でC・1に帰着後雪が降り出した。以降八月三日まで悪天候が続く、C・1に待機していたがそれでも回復せず全員がABCに下り次のチャンズを辛抱強く待った。八月四日になりようやくABCからC・1に登ることができた。

八月七日 晴れ後曇り

C・1から田中副隊長、鶴谷将俊、中村、井上、緒方、居谷、木本、広石がC・2入り。

六時半C・1出発

長く続いた降雪でC・1先のアイス・フィールドは深いラッセルだった。西稜取付きの氷壁は深雪と何度もあったであろう雪崩で固定ロープが埋没し、掘り出すのに時間がかかった。読書室上の庇には積雪がたまった形跡はなく、すっかり落ち着いているようだった。深いラッセルで読書室に入り八人がほっと一息つく。ここはほんとうにありがたいシェルターだった。十五時、ようやくC・2に到着。田中、鶴谷はC・1に下っていった。十二日ぶりのテントは屋根まで雪に埋まり、テントフレームがいか所折れてテントが20cmほど破れていた。テントを掘り起こすのが大変で終わって中に入ったのは十八時を過ぎていた。

八月八日 曇り、一時雪

アタック隊の緒方、井上パーティはC・2から個人装備と登攀用具のみ携行して先行し、中村、木本、居谷、広石のサポート隊がC・3の荷物と食料すべてを持って出発した。ラッセルが深く、また中村の体調が今一つ良くないこともあって、C・3予定のP・7(実際は雪のテラスでピークではなかった)には到達できず、平井隊長との交信でP・8の下に仮ACを建てて緒方と井上が泊まることにした。明日はアタック隊が個人装備のみ持ってC・3予定地までルート工作し、C・2を空身で出発する

サポート隊が仮ACを撤収してアタック隊の後を追う形でC-3を建設する計画とした。

岡本ドクターに酸素の使用について相談すると、今日は使用せず一泊し、明日の睡眠時に一人時間当たり0.5リットル使用するのが効果的だとのアドバイスがあり、従った。

八月九日 晴れ後快晴

緒方、井上は個人装備と登攀用具のみで仮ACを出発。8mm固定ロープ180m、6mm固定ロープ70m、9mm予備ロープ20mを岩交じりの雪稜に敷設しながらC-3予定地に到達した。先を急ぐためにフィックス・ロープの張り方を今までのサブ・ロープ方式(確保ロープとは別に敷設していく方式)からメイン・ロープによるワン・アット、フィックス方式に変えてスピードアップした。

ルート工作中にサポート隊が追い付き、必要な荷物が全てC-3に集結し、緒方、井上が明日のアタックに備えてC-3に留まった。

頂上アタックに至る重要な行動に焦点を絞って振り返ってみたが、渡渉事件以降、大きな問題を起こすことなく、隊員たちの登頂成功への献身的活動のプロセスが見て取れる。食料、装備の不足やけが人、病人の救出など、危機的状況はなく、ひたすら困難なルートに立ち向かうことができた。そして八月十日、九時十五分、コンダスの女王は我々を頂きに招き入れてくれた。

ヒマラヤの未踏峰にプロの登山家ではない我々が登る方法としてフィックス・ロープを多用し、極地法で対処することはよリリスクの少ない登山を目指す方法として捨てることのできる。装備や技術の進歩した今日ではあるが、最後は個人の技量

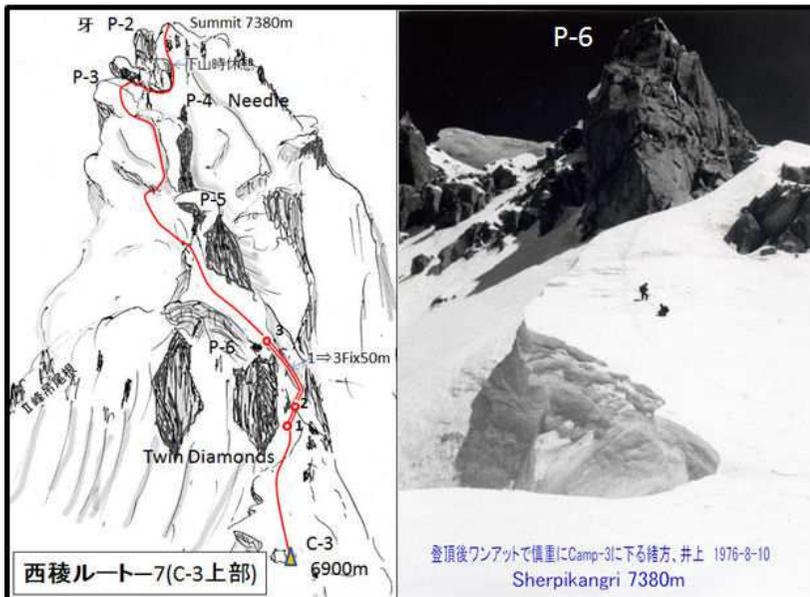


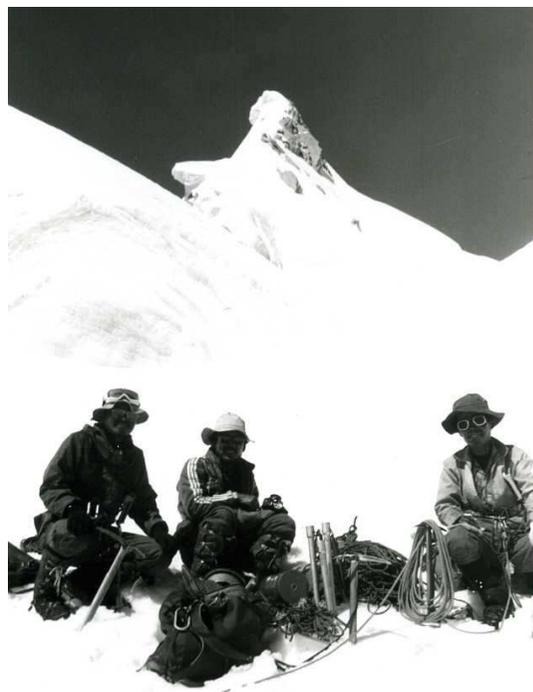
図 - 14 西稜登攀-7

と責任により事故や遭難を避けて未知への挑戦を続けていき
い。

あれからもうすぐ四十年、すでに何人かメンバーがこの世を
去った。2012年富士山で逝った緒方俊治、2006年に開
いたシエルピ・カンリ初登頂記念パーティに招待し来日を楽し
みにしていた矢先に急逝した連絡将校アサッド・ウラー・ジャ
ン・ミール、そしてポーター頭のオラム・ラッスールらだ。



BCにて
連絡将校アサッド、平井隊長、岡本ドクター



C-2にて 広石、井上、緒方